



国際比較教育学者

小池 松次

すいせんの言葉

理屈や美辞麗句を並べても始まりませんので、当てにならない歴史教科書の実例をお目にかけます。

例1 「昭和十二年七月七日、支那兵が、北京近くの蘆溝橋で演習中のわが軍に発砲して戦をいどみ、更にわが居留民に危害を加えるものさえ現われました。」

(初等科国史 昭和十六年 文部省)

例2 「昭和十二年(西暦一九三七年)七月、北京の近くの蘆溝橋で、とつぜん日支両軍の間に戦いがはじまりました。」(くにのあゆみ 昭和二十二年 文部省)

例3 「一九三七年、日本軍は北京の郊外で中国の軍隊を攻撃し、さらに上海でも戦争をはじめ、大じかきに中国へせめこみはじめた。」(あかるい社会 昭和二十

十九年 代表者 周郷博 中教出版)

例4 「一九三七年、日本軍は、北京の郊外で中国の軍隊と戦いをはじめ……」

(あかるい社会 昭和三十年 周郷博ほか八名 中教出版)

わずか十五年の間に、日本の歴史教科書記述は右のように四回も変わっています。ところが、右の四つの蘆溝橋事件の説明はいずれも間違いである、という大変な証人と資料が出てきたのです。証人は元中共軍将校の葛西純一氏、資料は中共軍政治部発行の初級革命教科書で、

「……胡服こと劉少奇同志は、アジトの一つである北京大学で抗日救国学生を組織して指導し、ついには一九三七年七月七日、暗闇の蘆溝橋で、中日両軍に発砲し、宋哲元の第二十九軍と日本駐屯軍を相戦わせる歴史的大作戦に導いた」というものです。

本書は、葛西氏が、日本側、中共側、国府側の膨大な生の文書を駆使して、この資料の真価を裏付けた貴重な記録です。

時流に便乗した軽薄そのものの歴史学者や、身の程知らぬ提燈持ちのマスコミ人種の書いた戦争論が、如何に真実の歴史を曲解し、善良な日本国民を愚弄してきたのかを余すところなく証明しています。

葛西氏のこの労作に啓蒙される人の多からんことを切に祈念するものです。

序に代えて

① 私が蘆溝橋事件の仕掛人は中国共産党(北方局第一書記胡服こと劉少奇)であると初めて知ったのは、一九四九年(昭24)十月一日の北京政権誕生直後、河南省洛陽市西宮に駐屯する中国人民解放军第四野戦軍後勤軍械部(兵器彈薬部)第三保管処に現役将校(正連級、日本の大尉に相当)として勤務している時であった。

その頃、閉された中国大陆は『人民中国』の誕生にわきかえっていた。中国人民解放軍総政治部発行のポケット版『戦士政治課本』(兵士教育用の初級革命教科書で、内容はいずれも中国共産党の偉大さを教えるものばかり)は、

「七・七事変(葛西注||中国では蘆溝橋事件を一般にそう呼ぶ)は劉少奇同志の指揮する抗日救国学生の一隊が決死的行動を以って党中央の指令を実行したもので、これによってわが党を滅亡させようと第六次反共戦を準備していた蒋介石南京反動政府は、世界有数の精強を誇る日本陸軍と戦わざるを得なくなった。その結果、滅亡したのは中国共産党ではなく蒋介石南京反動政府と日本帝国主義であった」と

と堂々と述べ、また次の記述もあった。

「同志諸君、このように中国共産党はいかに滅亡の瀬戸際に立たされても、断じて滅亡することはない。マルクス・エンゲルス・レーニン・スターリン主義、毛沢東

思想で武装された中国共産党は、限りなき手段を有する不滅の政党である。諸君は
いかなる困難に直面しようとも、中国共産党を信じ、無産階級と人民の利益を守る
ため前進しなければならぬ」

昭和28年から翌29年（一九五三―五四）にかけて、いわゆる中共帰国船（興安丸、
白山丸、白竜丸）で約三万二千人の日本人が帰国したが、「国共内戦で帰国のチャン
スを失った日本人居留民」と北京放送の伝えたあの日本人たちは、実は中国革命戦
争に八年間も従軍した革命者なのであった。彼ら三万二千人は殆んどが中国語の
『戦士政治課本』を読みこなせし、或る者は、

「日中戦争が中国共産党の仕組んだものだったとは……」

と憤慨もした。

しかし、帰国後は誰もそのことを口にしなかった。第一、八年間も遅れて帰国し
たのでは食うのに追われたし、一部の者は日本共産党に入党して『日本人民共和
国』の指導者を夢み、或る者はいとも要領よく『日中友好貿易』で一山当てようと
走りまわった。ごく少数だが、逆に日本軍部の在中国犯罪を書いて原稿料を稼ぐ者
もいた。要するに大部分の中共帰国者は食うのに追われ、一部の者は時流に流され
（或いは進んで迎合し）、誰一人として蘆溝橋事件が中国共産党の仕掛けた高等戦術で
あると中共軍内で公言されている事実を、国民に語ろうとはしなかったのである。

② 私が本書の刊行を決意したのは私個人の考えで、世論とか他人の意見は全く関
係がない。

たとえば世論といったところで、本件の場合、日本軍の誰が、いつ、どうやって
仕掛けた犯行なのか不明のまま「日本がやった中国侵略戦争」といったような説に
は全然価値がないのは当然なのに、それが逆に真実として価値づけられている。そ
んな程度のものを世論というのでは、私は世論など気にかけないことにするしか
ないのである。

公職選挙にみられる世論だって、きわめて怪しいものである。第一、選挙のとき
棄権するような怠け者が「政治不信」を口にするこゝ自体、おかしいのである。
『怠け者の論理』が世論を形成する一大要因となっていては、その世論には大した
価値がないのは言うまでもない。私は、五〇％前後の棄権率があるような選挙で選
ばれた『議会制民主主義』など、世論を代表するものではないと考える。

わが国では、ひところ、『大命』という言葉がはやった。昨今は『世論』が大は
やりである。私は大命がいけないのではなく、世論がいけないのでもなく、その内
容（質）が問題だと主張するものである。議会制民主主義にしたって、来たのはア
メリカ合衆国からだとしても、使っているのは日本人である。使い方がいいによっ
ては、従来の制度よりもデメリットが多いことだってあり得よう。いずれにしたと

ところで、他人から貰った服を改修もクリーニングもせず、得々として着ているような状態——怠け者の世論が横行している国情に私は挑戦するものである。

といったように本書は鼻息の荒らいものであるから、もし反論される場合は、従来の敗戦史観のような甘ちゃん論法ではなく、新兵器をもっておいで願いたいのである。つまり、何年何月何日何時何分、どこで、誰が、いかなる行為をしたのか、を蘆溝橋事件について論証（反論）してほしいのである。この場合、改めて断わるまでもないことだが、『日本帝国主義』という用語は『実行為者』ではあり得ないから、どうか色褪せた無益な作業はご遠慮願いたい。

③ 世の中には『盲点』とか『死角』と称される部分がある。『虚』をつかれることも無論ある。俗に「お釈迦さまでも知らない」といわれる事柄もある。「論語読みの論語知らず」といった例も実際にみられるし、甚しきは「医者の不養生」で早死する医者も少なくない。以上のような例を思いおこすなら、蘆溝橋事件が終戦処理の山にまじって一山いくらで「日本悪い」「帝国主義やった」と片づけられても、大した不思議なことではないかも知れない。

また「負けて勝て」といった論法からすれば「日本悪い」で通したほうが面倒臭くなくて、効果的だという見方もあるだろう。帝国老兵のなかには、

「今ごろ、三十七年も昔のことを掘っくり返さなくとも……」

といった声もある。この老兵たち、戦争中は五尺の体を六尺に肩を怒らせていたが、今は五尺の体を三尺に縮めて民主主義にオベッカをつかい、老齡年金増額要求を叫び、馬齢延命をはかっている。要するに、自分たちの尻をきちんと拭かないで死んでゆくところである。

確かに、正義、不正義は、力学的関係で決まるものに違いないから、「財を盗めば盗賊」となり「国を盗めば帝王」となることも事実である。しかし私は、そのような一般論に用はない。蘆溝橋事件の事実関係にのみ用があるのだ。何の目的でかといえば、後世代の人たちに「ありのままの蘆溝橋事件」を伝え、将来の日中問題を考える参考に供したいためである。

萎縮してしまった帝国老兵と、安逸をむさぼる戦後教育に反発するかのよう、近頃の青年学生は『日中戦争史』の相当部分に興味と疑惑を抱くようになった。私の講演に青年男女が多数を占めるようになってきたのも、そうした事情を裏づける一つの現われと思われるのである。

私は、青年たちの学究的情熱に元気づけられ、この本を世に問うことにした。繰り返すが、世論や他人の意見といった今はやりの風潮には少しも影響されていないのである。だが、言いたくない事ではあるが、当時、私と同じ二十歳台であった戦

友たち四十五万五千七百人（靖国神社にまつられている数）が日中戦争で戦死していることは、生き残った兵士の一人として胸が痛むし、また中国人民革命戦争（国共内戦）に従軍して犠牲となった推定五千名の同志（日本人男女）たちを思えば、生き残った者として心が暗くなるのは避けられないのである。私はふと、青年たちは日中戦争犠牲者の生まれ変わりではないのか、中国人民革命戦争犠牲者の転生者ではあるまいか、と思うことがある。そうでもなければ、至って取柄のない、無名の国民にすぎない私に蛮勇に近い勇気がわくはずがないからである。

私の本書によせる鼻息が途方もなく荒らいのは、そういった見えない糸にひかれていいるからではないか、と思われるフシもあるわけだ。

④ 従来の日中戦争史は『日本悪』という与えられたテーマに論点をしばった。裏返せば『中国善』という前提条件のもとに集成されたものである。その前に『戦争悪』といった大前提があった。

しかし『日本悪』は自分で自分の身をつねるようなもので、別に他人に迷惑のかかる話ではないが、『戦争悪』となると問題である。なぜなら、それでは内戦（革命戦争）まで否認することになり、中国共産党に叱られようからである。『戦争悪』という概念からすると、北京政府は南京政府に中国大陸を明け渡さなければならな

い勘定になる。

もう一つ『戦争悪』というのなら、戦争を誘致もしくは仕掛けた者も悪人ということに当然なる。そうすると、理由は何であれ、侵略した日本軍に負けず劣らず悪かったのは、蘆溝橋事件を仕掛けた中国共産党ということになる。

『中国善』という前提にたてば、それは文句なしに『中華民国善』ということになる。なぜなら、中国共産党は蘆溝橋事件の仕掛けに成功して間もなく、虎の子の中国人民抗日紅軍二万余人全部を捨て子し、中華民国国軍（国民革命軍）に編入、同軍第八路軍となったからである。中国共産党にとって蘆溝橋事件の仕掛けに成功したことは、それによって目前の強敵たる蒋介石中華民国政府のふところに逆に飛びこめたということ、中国（蒋介石）と日本を戦わせるということの二重の大勝利であった。このように『中国善』とは『中華民国善』のことであり、中国共産党は全く逆なのである。

日中戦争が中国人民に大きな迷惑をかけたというのなら、日本と共に中国共産党も謝るべきであって、いけしゃあしゃあとした天を欺く論理はほどほどにしないと天罰を食らうであろう。

従来の日中戦争史には、ちょっとついても以上のような欠陥がある。だから本書では、善悪感やイデオロギーにとらわれず、事実関係の追究につとめたのである。

日本側のマルクス・レーニン主義的立場にたつ日中戦争史（大部分はそうだが）に

は、故意か過失か、蘆溝橋事件仕掛人の事実関係が解明されていない。あれだけ大きな戦争の発火点となった蘆溝橋事件に、真犯人がいなくてもいうのであろうか。まさか、そうではあるまい。真犯人は見事に犯行を日本になすりつけ、日本ではまたその宣伝を意図的にかばい続ける勢力があったのだ。そういつて悪ければ、文部省や史学界に人がいなかったと嘆くことにしよう。

⑤ 「不法支那兵わが駐屯軍に発砲」「暴戾南京政府断乎膺懲」これは日本側資料（東京朝日新聞）の見出し。「日軍背信向我進攻」「決不求戦而応戦」これは中国側資料（蒋介石中華民国）の悲壮な文字。

要するに、一九三七年（昭12。民国27）七月七日深更、日華両軍に発砲者はいないのに、銃声は蘆溝橋畔の暗闇にとどろき、お互いに「貴軍の不法射撃である」とし、やがて大きな畏にはまっていたのである。

蘆溝橋事件には今まで未解決のナゾがいくつもあったが、本書では日本側、国府側、中共側の資料を再録し、その作業によって中国共産党の正体を白日の下にさらけ出すことに成功した。日本のいう『不法支那兵』と、中国側のいう『背信日軍』とは、実は中国共産党のことだったのである。

読者はこの点について、本書別稿『中共側資料』のうち『七・八電報』にとくに留意する必要がある。なぜなら、蘆溝橋事件の真犯人でなければ、あのような電光石火の早わざは物理的にできるものではないからだ。また、電文にある「日本軍が攻めてきた。北平が危い。天津が危い、華北が危い、中国が危い」という大ウソの部分と、「日本と妥協して平和を求める一切の幻想を捨てよ」と抗日統一戦線の実現を強調している部分は格別重要な証拠である。

次は同じく『日本側資料』のうち『東京裁判ナゾの部分』にご留意されたい。というのは、あの東京裁判が蘆溝橋事件の真犯人は、日本側にはいないと断定したほか、その上、逆に日本側から、

「犯行は中国共産党の実行したものだ」

とする書証と証人調べが申請されたので慌ててこれを却下し、ついに不問という珍現象を呈した経緯が明瞭になるからだ。それまでは、昭和二〇年十月二〇日（AP特約朝日新聞二十二日付け）の連合軍最高司令部陸軍法務官カーペンター大佐の談話に明らかなように、

「調査は真珠湾事件当時をさらにさかのぼり、支那事変またはパネー号事件当時にまで及ぼう」

と説明していたのである。

なお、南京国府から派遣された中国側の梅判事が、後に中国共産党員であったことが判明したのは、現在わが国の裁判所に巢食う赤色判事の存在と思いいわせて実に興味深いのである。

三番目は『中共側資料』のうち「蘆溝橋を訪ねて」なる人民中国誌記者のルポにご留意されたい。蘆溝橋には、世にも不思議なことに『記念碑』が建っていないのだ。満洲事変の発端となった柳条溝や、平頂山事件（満鉄撫順炭鉱）の現場には記念碑や記念館を建てて大宣伝する中国共産党が、これはまたどうした手落ちなのであろうか。否、さすがの中国共産党も自分がやった蘆溝橋事件の現場に『此処日本帝国主义侵略中国戦争発動之地』という記念碑は建てられないのかも知れない。そうみる方が妥当であろう。

もっとも『中国人民革命軍事博物館』なる建物（いかなる親中共派の日本人でも中を見たことのない、日本人には『開かずの館』。天安門と人民大会堂の道を西へ行き、八宝山共同墓地公園、石景山コンビナートに行く方向右側、復興門外）に入れば、蘆溝橋事件の真犯人は高らかに笑っているに違いない。だからこそ、この建物だけは、いかなる親中共派でも『日本人』と名のつく者には『開かずの館』なのである。

⑥ 以上は私の考え、見方であるが、本文内容は資料だけである。日本側資料のう

ち、東京朝日新聞記事については当用漢字と新仮名づかいに直した部分があり、また『、』『。』をつけて読みやすくしたが、筆写内容は正確を期した。国府側資料のうち中国文のものは私が邦訳し、邦文のものについては冒頭に『日文』の注記をつけた。中共側資料も右に同じである。

最後に、採算を度外視して本書の刊行を快く実行して下さった瀧砂成祥社長に、深甚の感謝を表する次第です。

一九七四年十一月

葛西純一